

小1 プロブレムを乗り越える学習形態・方法の工夫

—数の学習を中心として—

New learning forms and methods for overcoming children's
difficulties in transition to primary school
—Centering on learning of numbers—

お茶の水女子大学附属小学校

富田京子

- I 研究主題設定の理由
- II 研究の内容
 - 1. 入学当初の子どもの捉えと指導の工夫
 - 2. 学習に対する入門期の子どもの実態
 - 3. 入門期における学習指導の工夫
- III 実際の授業（数の学習）
 - 1. 実際の授業をどう組み立てるか
 - 2. 単元の目標
 - 3. 指導計画
 - 4. 実際学習の記録
 - 5. 単元を振り返って
- IV 考察と今後の課題
 - 1. 考察
 - 2. 今後の課題

I 研究主題設定の理由

小学校に入学してきた子ども達はどの子ども、新しい生活に対して大きな期待を持ち、何にでも意欲的に取り組もうとしている。ではなぜ、「小1プロブレム」ということが叫ばれているのだろうか。入学してきた当初から、「席に座らない。」「大声で走り回る。」「落ち着きがない。」「やる気が見られない。」等、様々な状況が報告されている。原因はいったい何にあるのか。どうすれば、落ち着いた入学当初の生活を築くことができるのか、を考えていくことにした。

本年度、本学の「接続期」の研究を通して、入学期の子どもの様子や彼らが卒園してきた幼稚園・保育園との大きな段差にどう対処していけばいいのかを考えてきた。実践を通して、「小1プロブレムを乗り越える学習形態と指導法の工夫」について糸口をつかみたい。

II 研究の内容

1. 入学当初の子どもの捉えと指導の工夫

入学してきた子ども達は、新しい環境の中で自分の居場所を確保し、安心して生活に取り組むことを求めている。幼稚園・保育園時代の子ども達は、年長組としての範囲の中で一人一人自立した生活を経験してきている。だからこそ、小学校生活に大きな期待と自分なりの自信を持っているのである。だが、小学校に入ったとたん、年少者としての環境を与えられ、退行してしまう部分が多く見られる。要因としてあげられることは、年長者が多い集団に属すること、新しい環境の中で1から手をかけてしまう場面が多くなることなどがある。

入学当初に大切にしたいことは、教室内での生活を安定させ、不安感を取り除くこと・年長組だったときの生活を想起させる言葉かけをすることにより、「これは、今までやってきた」という感覚をしっかりと持たせ、自信を失わせないことである。

具体的に取り上げたのは、幼稚園・保育園時代の生活と共通するもの「登校後の準備・下校時の準備・時間の使い方・お昼の時間」などの場面である。

— 事例1 (登校後の準備の仕方を指導する前の場面) —

- T「幼稚園や保育園では、登園したらすぐ、どんなことをしたかな？」
C「あそぶ」
C「朝の挨拶をする」
T「その前にやることはないかな？」
C「鞆を置いて、園服をぬぐ。」
C「出席カードを出す。」
T「そうですね。小学校でもまず最初にやることは、同じです。でも、片づける場所や入れる場所が違うので、それを覚えていきましょう。」
C「先生が、やってくれるの？」
T「幼稚園や保育園でも先生がやってくれたの？」
C「ううん。自分でできたよ。」
C「年少の子のもやってあげたよ。」
T「それはすごいね。みんなは、3月までお兄さん・お姉さんだったんだもんね。なら、小学校になってもできるよね。」
C「簡単、簡単」「できる、できる」「えっ、めんどくさい。」
T「まずは、やってみようね。」
C「どうやるの？」
C「間違っちゃったらどうする？」
C「覚えられるかな？」

場面は同じでも、小学校と幼稚園・保育園では手順などは大きな違いがある。また、すぐに慣れて出来るようになる子と何度も繰り返し行うことで習得していく子もいるので、一人一人のペースに合わせ十分な時間を取っていくことが大切である。

ただし、子ども達が小学校での生活としてイメージし、期待を大きく持っていることは、「机に向かった学習」場面である。入学当初の「生活の方法を知る」ことが大切な学習なのではあるが、そのことばかりでは満足しない。

幼稚園の生活を関連づけられる場面と子どもが期待している学びの場面の両方を明確に設定していくことが、入学当初の子ども達の実態を捉えて、学習を計画する上で大切なことであると考えられる。

事例2 (幼稚園生活とのつながりと子どもが期待している学ぶ場面の設定)

入学式翌日の「自分の好きなものの絵をかこう」という活動で、何もかかなかったS。

S「絵は描きたくないしな? 別にかくことない…。」

何もかかずに、その日の生活を終える。かく時間のあとの遊びの場面でも、友達の中になかなか入っていけなかった。

朝の会は、教室前のスペースを使い、子ども達が膝を付け合わせて集まれる場所を作り、行ってきた。本の読み聞かせや今日の予定についての確認など、体が寄り添い、安心できる環境を整え、毎日の生活に取り入れていった。

ある日のSのつぶやき。

S「先生、この場所って幼稚園の時もあったよ。」

T「どうかな? 小学生がやったらへんかな?」

S「大切なお話だな。と思うし、すぐに友達としゃべれるし…。」

T「近くにみんながいるといい?」

S「うん。」

その後、「春みつけ」の学習でみつけたものをノートに記録し、発表するという活動で、机に座り、自分が見つけたものをノートにかいていく場面。

S「いっぱいみつけたよ。何個かいてもいい?」

T「たくさん教えてね。」

S「ちゃんと座って、絵もかけるんだよ。絵は好きだから。」

と、意欲的に活動に取り組んでいった。

S児は、一斉の活動ではなく、幼稚園では自由にその日自分がやりたいことを考えて活動してきた。そのような子にとって、教師側から与えられる活動にはとても抵抗がある。絵をかきたい気持ちがないときに絵を無理矢理かかせることは、この段階では大切ではない。S児の行動の後ろにある、経験してきた園での生活を理解することが大切である。彼が望んでいることは、お絵かきではなく、勉強であった。ここで言う「勉強」は子どもが期待している「机に向かって学習(字を書く・教科書を読む)すること」である。その場面がなかなか出てこないことで、「小学校って楽しくないな。」と不満をもちやすことも家庭であったようである。さらに、S児は新しい友達がなかなか作れなかった。

S児にとって、自分が思い描いていた「小学校生活」とはかけ離れていた生活がそこにはあった。S児は大人しい性格だったため、表面的な問題行動にはならなかったが、心の中で満たされない欲求を感じている子ども達は少なくないのではないだろうか。

ただし一方では、子ども達が思い描いている「小学校生活」を実際に行っていけば上手くいくのだろうか、という疑問もわいてくる。子どもの知識・集中力等を考えると無理である。子どもは、思い描いている自分と実際の自分についてのギャップを認識することができない。学習の詰め込みをすると

キャパシティが少ない子ども達は、パニックになりました、逆の不満を持つことになる。

したがってどの程度、「実態と期待」を兼ね備えた計画を立てられるかが、問われることになる。

今回、「実態と期待」を兼ね備えた実践として試みたのは、教室に2つの場を設定するということであった。見た目のことだが、実際活用してみると、先に挙げた事例のように子どもの変化を捉えることができた。教室前に「集まる」スペースを作ることだけだが、子ども達の体が寄り添い、友達を感じる場になっていった。座席に座っている時は、子ども達が期待する「小学校生活」をイメージできたようである。教師側にしてみれば、「小学校の生活の方法を学ぶ」ことが、これからの学習に対する基礎・基本だと考えていても、子どもにとっては、学習とは捉えにくい。みんなで集まって話を聞くことは、幼稚園生活を想起させ自信をもって取り組める。そのような幼稚園・保育園での経験や生活の様子を取り上げながら小学校の生活の方法を学ばせていくことができた。「そう、それはやってきた。だから、こんなこともきっとできる。」という言葉として、実際に行動としてすぐにやってみるという姿勢を育むことができた。座席でノートを広げることは、「やっぱり、小学生になったんだ。」という満足感も味わえ、意欲的に学習に取り組むことができていた。

2つの場があることで、視覚的にも実体験としても2つの学びがあることを理解することができるように思われる。

2. 学習に対する入門期の子どもの実態

入学してきた子ども達は机に向かってみんなで同じことをする学習を期待している。しかし、小学校では、子どもが期待している学習の形態として、文字や数を数えるのではない。何のために、文字や数の学習が必要なのかをもう一度考えてみる必要がある。

子ども達は、乳児期・幼児期の中で、自分以外の人とのかかわりを身体的接触と言葉による接触とで深めてくる。年齢が低いほど身体的接触でのかかわりは大きく、年齢を重ねるごとに言葉を媒介とした接触が大きくなっていく。言葉を獲得し、自分の発した言葉が相手に伝わるといった実感は大きな感動となり、言葉の獲得をさらに意欲付けることになる。小学校入門期の子ども達は、かかわり合うための道具としての言葉を持っている。自分の思いを伝えるための道具としての言葉をさらに増やしたいのである。6・7歳の子どもにとって、話すことは書くことよりも大切な手段である。ならば、なぜ書くことがでてくるのであろうか。生活の場が広がり、「学校」「家」「習い事」「その途中の道」等々、様々な場の中で、自分が体験したこと感じたことが生まれてくる。学校のことを家で家族に、家でのことを学校の先生や友達に、伝えたい欲求が大きくなればなるほど、伝えたいことが多くなればなるほど、自分の記憶の中だけにとどめておくことは難しい。そのときに初めて、記録をしたいという欲求が生まれてくるのである。そのための道具として、言葉を書く手段である。文字の習得をしようとするのである。ちょうどその時期が、小学校入学の子ども達である。

最近の子ども達の様子を見てみると、文字を習得したいという欲求より、記号として覚えてくると言う傾向が多いように感じる。知っていること・書けることが自信というより、自慢になっている。欲求の中で獲得したものではないことの現れとして、文字は知っていても、言葉を知らなかったり、言葉を知っていても、その意味を知らないので、伝える手段としての言葉と記録する手段としての文字が結びついていない場面が多く見られる。

もっとも顕著に現れているのは、算数の場面についてである。数字は知っている・書ける、数は数えられる、だが、「リンゴが3個」の「3」と「鉛筆が3本」の「3」の共通点・違いが理解できない。100まで唱えられるが、100という数の集まりはイメージできない、実際に正確に数えられない。「春みつけ」でさがしてきたものを伝えられない。「○○のような形」—形の名前はたくさん知っていても、見立てることはできない。「白い花と黄色い花がたくさんさいていました。」—たくさんという数のイメージの共有化ができない。

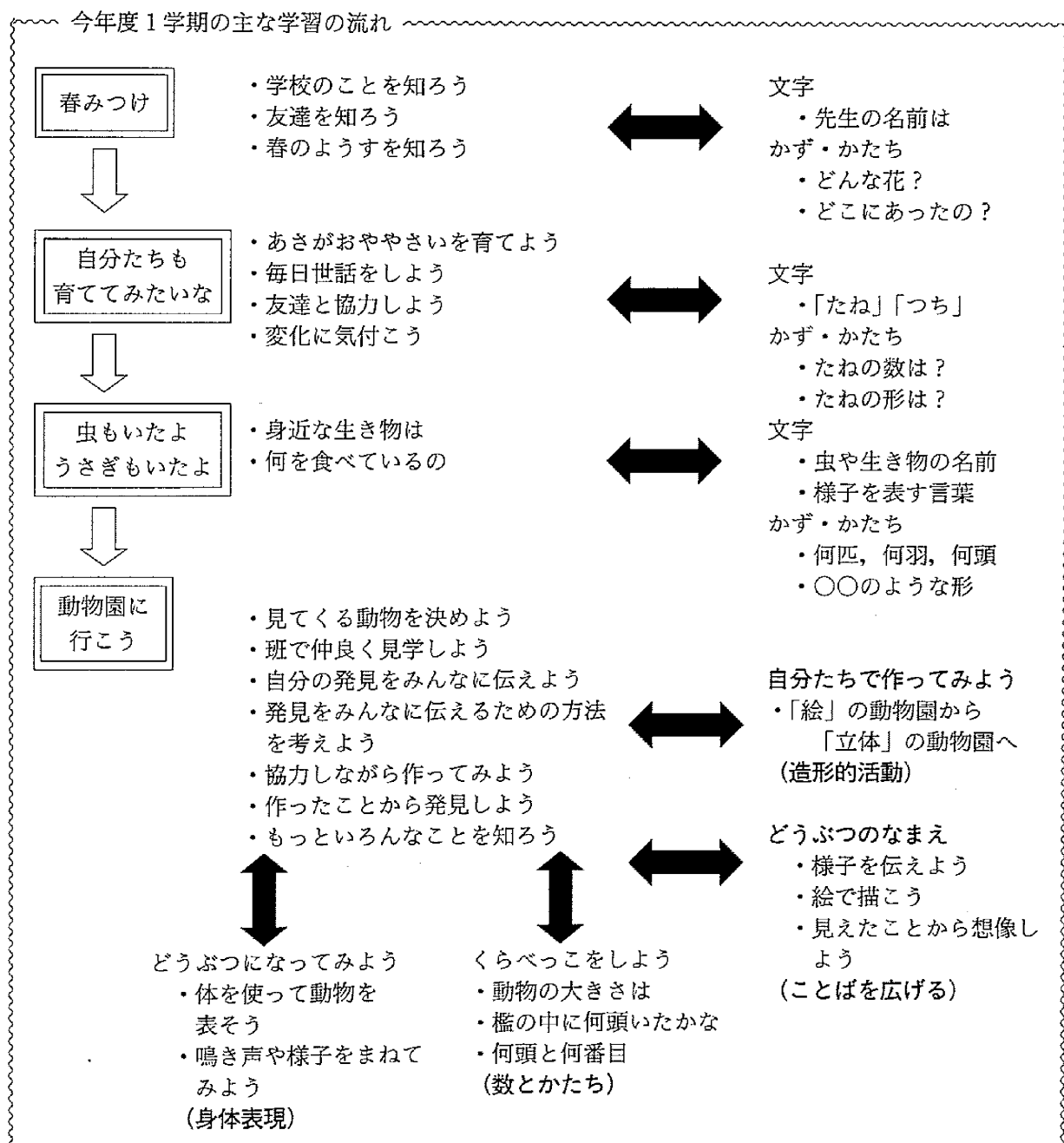
また、今は取得できる情報量が大量にあるため、1年生の子ども達も様々なことを知っている。それは、実体験が伴っているのではなく、耳から入ってくる・目から入ってくる情報である。本やニュース・写真やビデオ、実際に見ていなくても、触れていなくても記憶に残ることが、感覚を耕す五感に影響を

与えていることがある。頭の中の知識が溢れるばかりだが、ハンカチはきちんとたためない、靴下が上手にはけない等、本当に知っていること・本当にできることを把握することが難しい。

元来、学びは、生活経験・体験から欲求として必要となるものを取得していくことが基本であったと思うが、今は、技能としての学びが優先され、生活経験や体験は重要視されていない。特に、家庭教育にその傾向が大きく現れていると考えている。家庭や社会からのニーズに後押しされて、学校教育の方向も知識・技能に傾いているのが今の教育界の流れであろう。

3. 入門期における学習指導の工夫

以上のような実態にある小学校入門期の子ども達にどんな学習を組み立てていけば良いかを考え実践してきた。重視したのは教科学習の分類がありつつも、もっと生活全体を組み込んだ学習の流れを作ることである。



入門期の子ども達に、「さあ、算数です。さあ、国語です。」と言っていくら身近な課題を提示していても子ども達にとっての必然性は生まれてこない。活動の中から必要に迫られていく場面を取り上げていくことにより、子ども達の学習していこうとする意欲を高め、学習として獲得していく量を増やす効果があるのではないかと考えた。

今回の研究で大切にしたいことは、教科の枠を越えた学習の組み立てと展開である。子ども達の活動の大きな流れを作り、各ポイントごとに段階を経た学習を取り入れていった。

例えば、現行の国語の教科書は、平仮名は「画数の少ないものから」や、「五十音順」で学ぶようになっているものが多い。しかし、本実践では、一番頻繁に使う言葉、「教師の名前」や春みつけで見つけてきたことば、「はな」や「つち」「たね」という言葉から学習をしていくようにした。もちろん、字形を整えたり、書き順を覚えたりするには時間がかかるが、よく使う言葉を書くことにより、生活と学習につながりがあると考えたのである。また、学習した1文字1文字から、言葉探しをし、絵で表すことで、言葉の意味と言葉が表す具体がつながっているかを確認していく場面を大切にしたい。さらに、子ども達が活動の中で見つけたものや発見したことを紹介する活動から、ものの様子を伝える言葉を取り上げることにより、言葉から受けるイメージを共有化したり、より詳しく説明する言葉を探したりする活動を通し、語彙を増やしていく場面を大切に扱った。特に、上記の表からも分かるように、「動物園へ行こう」の活動を通して、身体表現・数とかたち・ことばを広げる・造形的活動といった学習を展開することで、子ども達が実際に経験したことや発言したことから様々な学習へ広がっていくことで、自分たちが学習を作っているという意欲を高めることをねらっていた。

ただし、留意しなければならないのは、何でも子どもの発言や発想に沿った学習を展開していけばいいというものではないことである。小学校の学習の中には、各教科ごと各学年ごとに習得すべき内容が明確に示されている。内容を教師自身が把握していなければならない。子どもの活動を支えつつ、どの場面で何を指導していくかを判断しながら、学習を組み立てていくことである。また、子ども達一人一人の状態の把握をしていくことも大切なことである。各教科ごとに組み立てた学習の展開では、子ども達一人一人の学習状態は把握しやすいが、学習活動がダイナミックになればなるほど、全体の把握に追われ、一人一人の活動が観にくくなる。だからこそ、一人一人のつぶやきや活動に目を向ける姿勢が必要になってくるのである。

III 実際の授業（数の学習）

1. 実際の授業をどう組み立てるか

実際の授業の中を組み立ててるときに、教科としての内容と入門期の子ども達の実態をどう踏まえて計画を立てていくかを考えた。小学校の学習は多教科に渡っているので、「算数科・数の指導」に焦点を当てて、考えてみることにした。

(1) 算数科での「数」の指導

学習指導要領での、1学年の「数と計算」領域の目標は、

具体物を用いた活動などを通して、数についての感覚を豊かにする。数の意味や表し方について理解できるようにするとともに、…（以下略）

である。さらに、内容として

A(1) 数の意味と数の表し方

(1) ものの個数を数えることなどの活動を通して、数の意味について理解し、数を用いることができるようにする。

ア 対応などの操作によって、ものの個数を比べること。

- イ 個数や順番を正しく数えたり表したりすること。
- ウ 数の大小及び順序を考えることによって、数の系列を作ったり、数直線の上に表したりすること。
- エ 一つの数をほかの数の和や差としてみるなど、ほかの数と関係付けてみること。
- オ 100までの数について、その表し方と意味を理解すること。

が示されている。

小学校入門期の指導として大切な内容は、ア・イである。学習する実際の数は、1～10までの数である。「数」について、教師が教える内容と学習の中から子ども達に見出させる内容を明確にしなければならない。「数」の指導について片桐重男氏は、その著書の中で以下のように体系を論理的に構成している。（『算数科の指導内容の体系 2001年 東洋館出版から引用・抜粋』）

教える内容	見出せる内容 T：定理に当たるもの
数えることとその基礎的な経験	
<ul style="list-style-type: none"> ・簡単な場合について、ある条件に合う集まりを作ること ・2つの集合の要素を1対1に対応させたとき、残りのある方が個数が多く、何も残りがな いとき個数は等しい ・簡単な場合の数量の保存性を認める（移動しても個数は変わらない） ・数字による数の表し方 ・数詞の読み方 ・集合数と順序数の意味（何個と何番目） 	<ul style="list-style-type: none"> ・数える対象の集合を捉えること ・数詞や数字を、ものやその集合と1対1対応させられること（数詞を数えるものと対応させたとき、最後に対応させた数詞が対応したものの全体の個数を表すこと） ・簡単な場合に、数を使って表された個数の大小や順序の判断ができること
数の用い方	
<ul style="list-style-type: none"> ・ものの個数を表す ・一列に並んでいるものの順番を表す 	<ul style="list-style-type: none"> ・ものを分類したり整理したりしたときの結果を表す分類・整理番号 ・一列に並んだものの位置を表す
数え方の工夫	
<ul style="list-style-type: none"> ・2つずつ、5つずつ、10ずつまとめて数える ・数えやすいものに置き換えるという最初の発想 	<ul style="list-style-type: none"> ・適当な観点によって分類して数える

片桐氏の考えをもとに、子ども達に教えることを「数の書き方・読み方・数え方」を中心に置き、「実際に数を数え、その集合をみつける」ことを子どもの活動の中心に置くことにした。

(2) 入門期の子どもの捉え

前章でも述べたように、入門期の子ども達は、学習に対する大きな期待を持っている。しかし、その反面教え込みの学習では理解の定着は図れない。大切にしたいのは、活動（実際に動き・実際にやってみること）である。繰り返しの学習を行うことで、次への見通しも持て、意欲が続いていくことが予想される。ただ単に繰り返しだけでは、飽きてしまうことが予測できる。自分の発言や友達の発言から発展していく学習を行うことで、自分たちが学習の主体であるという安心感と充実感を持たせる工夫をしていくことを考えた。

数詞や順序数、数の大小を数みつけの学習場面を基本にしながら、随時導入していくことで、単調な学習にならないような工夫をしていく。

(3) 単元を構成する

上記の考えを元に、実際に「数について」の学習を以下のように構成した。

子ども達の実態を考えると、1年生でもたくさんの数を知っている。子どもによっては、「万・億・兆」までの数を知っている子もいる。大きな数を知っていても、数詞や単位になると知らないことが多い。また、実際に数を数えてみると10以上の数は、抜けがあったり・重複して数えたりと曖昧である。ここでは、1～10までの数を数字としてかくこととしっかりと1対1対応で数を数え「数みつけ」の活動を重点的に扱っていくこととした。

数について指導することとして（算数科の指導内容から）

- ・記号としての数（1・2・3・4・5・6・7・8・9・10）
- ・集合数としての数（○個、○匹、○本、○台……数詞をつけた数）
- ・順序数としての数（○番目、○巻……）
- ・数の合成と分解（いくつといくつ）

の4つに重点をおいた。学習活動としては、実際に数を数えることを丁寧に扱い、指導計画を立てた。扱う数は、春みつけで、校庭の桜の木を見つけてきた子どもの発言（校庭に、さくら花がたくさんさいている木が3本ありました。）をとりあげ、「いろいろな数を知り、数を数えてみよう」という「数みつけ」の学習を設定した。様々な「数」の見方の学習を行う際も、「数みつけ」で子ども達が見つけてきたことを素材に取り上げ、学習を組み立てていくことにした。（子どもの実態から考えた、学習形態・方法）

集合数と順序数・合成分解を単元として分けて指導するのではなく、まとめて指導することにより、数の見方には色々な要素があり、必要に応じて数の見方を選択していくことが大切であることを知らせるためである。学習の中では、一緒に扱うが、場面や具体的な活動を考えるときに少しずつ分化させたり、抽出して集中的に指導したりという工夫をすることに留意した。（算数科の指導内容からの学習方法工夫）

2. 単元の目標

(1) 算数科として

- （意欲・関心・態度） 数を数える活動を通して、数についての興味・関心を深める。
- （数学的な考え方） 数の色々な見方を知り、場面にあった数の数え方を考えることができる。
- （表現・処理） 数を数える活動を通して、場面にそって、数を書いたり、数えたりできる。
- （知識・理解） 1～10までの数がわかり、書いたり、数えたりする。

(2) 入門期の子どもの実態から

- ・自分でみつけてくる活動を通して、数に対しての興味・関心を高める。
- ・見つけてきたことや発見したことをみんなの前で伝えることができる。
- ・友達の発表を聞き、自分もやってみようという意欲を持ち、学習に取り組む。
- ・自分の知っていることを深めながら知識を増やし、充実感を持つ。

3. 指導計画（全50時間）

(1) 「3」を見つけよう（3時間）

- ・「3」の書き方と意味
- ・教室のまわりで、「3」を見つけてこよう（見つけたものを絵で記録しよう）
- ・見つけてきたものを紹介しよう（見つけたものを言葉で伝えよう）
- ・友達が見つけたものを見に行き、もう一度数えてみよう（一緒に数えよう）

(2) 「2」を見つけよう（3時間）

(3) 「1」を見つけよう（3時間）

「2」「1」については、「3」と同様

(4) 「4」を見つけよう（4時間）

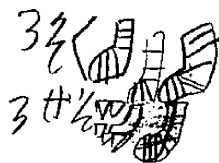
- ・「4」書き方と意味

- ・「4」みつけ
- ・みつけてきたものを紹介しよう
 - ※「4」みつけて、4階（校舎の階数）
4階（自分の住んでいるマンションの階数）がでたので、
この発表を取り上げ、順序数についての見方を導入した。
- (5) 順序を表す数について知ろう（2時間）
 - ・4巻と4缶の違いはなんだろう？
 - ・絵に表して考えてみよう
- (6) 「5」を見つけよう（5時間）
 - ・「5」の書き方と意味
 - ・偶数の「5」と順番の「5」を考えよう
 - ・「5」みつけ
 - ・みつけてきたものを紹介しよう
 - ※「5」みつけて、花壇のチューリップが5本咲いている。という発表のとき、他の子どもから、赤いチューリップが3本だった。黄色いチューリップが2本だったから、なんか違う言い方のほうがいいのか。という言葉を取り上げ、いくつといくつの見方を導入した。
- (7) 「5」は、どんな数に分けられる（2時間）
 - ・3と2で「5」のほか「5」は、つくれないかな
- (8) 「6」を見つけよう（6時間）
 - ・「6」の書き方と意味
 - ・「6」みつけ
 - ・みつけてきたものを紹介しよう
 - ※「6」みつけて、6年生なのに、絵で書くと1人だったり、大勢になったりする絵を取り上げ、集合数についての見方を導入した。
 - ・いくつといくつ（いくつといくつでお話を作ろう）
- (9) 集まりの数について知ろう（1時間）
 - ・1年生なのに、120人いるのはどうして。
 - ・3ファミリーなのに、4人
 - ・2号車なのに、10人
- (10) 「7」・「8」を見つけよう（5時間）
- (11) 「9」・「10」を見つけよう（5時間）
- (12) いろんな数を分けてみよう（10時間）
 - ・「1」～「10」までの数の合成と分解
 - ・いくつといくつでのお話作り
 - ・いくつといくつのカードづくり

4. 実際学習の記録

（最初、「3」の学習での子どものノート）

資料1



「5」を見つけよう（5時間）

1時間目

「5」の書き方を知る。
身の回りにあるものの中から「5」を探す。

「5」の書き方と5という数について、学習した後、

- T それでは、「5」の数をさがしてきましょう。
「5」がつく、言葉はどんな言葉がありますか、
C 5台、5匹、5人、・・・
C 5階、
C 学校にはないよ
C 私は、5階に住んでいます。
C 5年生

※5階については、前時の学習からでた発言である。

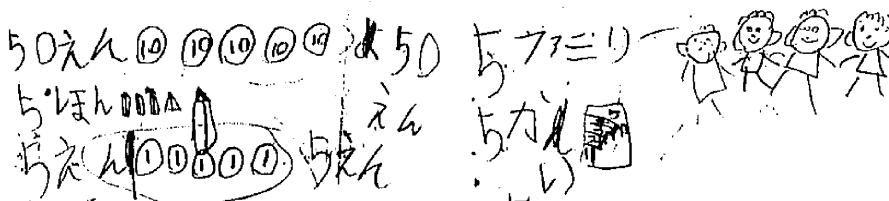
新しい学習とは、分けて取り上げている。

- T 順番を表す数もいくつを表す数も見つけれられるといいですね。
いつものように、「5」みつけに行ってきましょう。

(子どもの意欲を高め、新しい視点を伝える・子どもの活動時間の保障)

(「5」みつけの子どもの発見ノート)

資料2



5時間目

赤いチューリップが3本、黄色いチューリップが2本の絵から
「5」の数のしくみを考えよう。

T 前の時に、

「チューリップが5本。」

と、紹介してくれたと友達と

「赤いチューリップが3本で黄色いチューリップが2本で、5本咲いていた。」

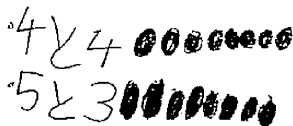
と、紹介してくれた友達がいましたが、「5」の数をもっといろいろな数に分けることは出来な
いかな。(子どもの発言を取り上げる教師の姿勢・新しい学習の導入)

- C できるよ。
C わかんないな。
T (黒板に赤いおはじきと黄色いおはじきを5個ずつ提示)
赤いチューリップが5本だったら、どんな絵になるかな?
C 赤い花が、5本。
T (赤いおはじきを5個提示)

- 赤い花が、3本で、黄色い花が2本だったら。
- C 赤い花を3本と黄色い花を2本
- T (赤いおはじき3個と黄色いおはじき2個を提示)
- C えっと、
- 赤いチューリップが2本で、黄色いチューリップが3本でも5本だ。
- T (赤いおはじき2個と黄色いおはじき3個を提示)
- C うーんと、黄色いチューリップ5本もある。
- T (黄色いおはじき5個を提示)
- C もうないね。
- C まだ、ある。赤いチューリップが1本と黄色いチューリップが4本。
- C 黄色いチューリップが4本と赤いチューリップが1本。
- T (それぞれを提示)
- 「5」もいろいろな形にへんしんしましたね。
- 「5」の数には、いろいろなものがありますね。
- 全体を数える「5」
- 順番を数える「5」
- 変身して2つに分かれる「5」
- C 変身の「5」が、今日は新しいね。
- C ちょっとまだ、難しいかも。
- T また、いろんな数の時に考えていきましょうね。

(その後、「7」や「8」の学習での子どものノート)

資料3



資料4

あかいかみを5本
いあこひとが5本
いもらって8本
りました。

あかいかみを4本
いあこひとが4本
4もらって8本
りました。

5. 単元を振り返って

子ども達の「知っている。」(数を知っている)という自信が、実際に繰り返し、具体物を数える活動を行うことによって、数についての興味を深くし、学習を1段ずつ積み重ねていくことができたと考えている。繰り返しの学習は、子どもにとって、安心感がある。「前にやったとおりでいいんだ。」「この間は、こうだったから、今度はこうしてみよう。」という自分なりに発展させたり、工夫したりする意欲も引き出すことができた。今回、一番の大きな成果としては、学習を子ども達の発言から取り上げて進めていくことで、子ども達の意欲は高まり、「僕(私)も、こんなことみつけてきたよ。」という発言が多くなった。算数の時間を離れても、身近な場面で「数」を意識したり、友達に伝え合うという活動が見られた。入門期の子ども達は、「算数科」の学習という枠を離れ、生活全体の中で学習する姿勢を培っていく素地に触れることができたと思う。

IV 考察と今後の課題

1. 考察

本研究を通して、小学校入門期の子ども達にどのような学習形態・学習方法が大切なのかを考え、実践を行ってきた。「小1プロブレム」の解決方法を考える一つの事例になればと考えている。実際に本研

究を行った学級が「小1プロブレム」に該当している訳ではないが、入門期の子ども達が抱えている期待と不安は同じであると考えられる。本研究を行い、子ども達一人一人に寄り添うことの大切さを改めて確認することができた。

「小学校1年生なら、入学前にこれくらいのことではできているのではないか。」「こんなことができないなんて、幼稚園・保育園では何をしてきたのだろうか。」「入学前の家庭ではどんな、経験をさせてきたのだろうか、家庭教育はどんなであったのだろうか。」と、言う先入観を持つことが怖いことである。小学校へ入学してきた、子ども達一人一人に経験や学びがあり、期待と欲求があるのである。教師側の思いだけを子どもに押しつけてはいけない。幼稚園・保育園では、それぞれの教育・保育内容を受けてきている。それぞれの集団の中で安心し、充実した生活をしてきたのである。小学校は、その様々な経験を持った子ども達が新たな環境の中で集まり、新しい生活集団を作っていくのである。6年間長い期間で培っていく資質や姿勢が、すぐに身につく・すぐになじむということ自体が無理なことである。さらに、小学校6年間の生活にすぐになじむようと、幼稚園・保育園の教育のあり方を変えていくことを望んでもいけない。子どもにとって、段階よっての発達があるのである。低年齢期に培うべきことが身に付いていけばいいのである。一人ひとりの入学前の経験を受け止め、小学校生活の中でつなげてく時期こそが、入門期なのである。

入門期において、小学校の学習をすぐに始めることはどの学校でもしてない。しかし、生活に慣れるための時期として捉えるだけでなく、学習に取り組むための素地を作る場として入門期を考えることが大切である。入学前の経験を受け止めるためには、小学校の教師が幼稚園・保育園の教育・保育内容を十分に理解することが必要である。子ども達の入学前の経験を肯定する部分を見出し、認め励ますことで、子ども達は自分に自信を持ち、意欲を持って小学校の生活に向かう姿勢ができる。「あれも、できない。」「これもやりなさい。」では、小さいながらのプライドを傷つけることになってしまう。教師の一つ一つの発話は、入門期の子どもにとって重要である。子どもは、新しい環境の中で教師と1対1の関係を持つことをよりどころとしている。教師との関係が安定し、安心して生活ができる段階を経て、友達とのかかわりへと広げていく。

幼稚園・保育園と小学校は、何をつなげればいいのか。教育内容が違う両者が、つながるところはどこか。それは、「学び・成長し続ける姿勢」では、ないだろうか。幼稚園・保育園の生活の中で子ども達は、学び続けている。「様々なものや場面とかかわり生活を豊かにしていく姿勢」「新しいものとの出会い、気付いたり、発見したりする喜び」「ものごとに関心を持ち、じっくりと取り組む姿」「自分の思いや考えを伝えようとする姿勢」「集団生活でのマナーを体得する姿」等があげられると考える。「学び・成長し続ける姿勢」は、小学校へ入学しても大切にしたいことである。子ども達は、いつでも学び続ける姿勢で、意欲的に生活や学習に期待し、取り組んでいるのではないだろうか。

「学び・成長し続ける姿勢」を受け取った小学校入門期の教師が大切に考えることとして、①幼稚園・保育園での生活から体得してきた自信をつなげる②小学校の生活に安心してとけ込み、自分の居場所を確保すること。③幼稚園・保育園での生活リズムから小学校の学習形態のリズムへとつなげていくことである。この3点を、子どもの側からの視点を大切に、彼らを支える役目として教師が働きかけていくことを大事に考えていきたい。

2. 今後の課題

本研究では、子どもの実態を捉え、学習を形作っていくことの大切さが明らかになったが、具体的にどう小学校教育の中で位置づけ、実践をしていくかはまだまだ研究を重ねていく必要がある。

特に、考察であげた、3点について考えを深めていく必要がある。①については、今年度、実際に附属幼稚園の先生方との交流を頻繁に行ったことで、自分自身の理解は深められたと言える。②については、環境の工夫をしたり、朝や帰りの会・学習形態の工夫を行ったことで、落ち着いて学習に取り組む姿勢が育ってきた。③については、まだまだ研究や実践を積み重ねていかなければならない。今年度は、1学期を入門期として取り組んできた。緩やかな流れの中で子ども達は、ゆっくりと成長していくことができたが、教科教育とのつながりを考えると曖昧な部分が多く残った。子ども達にとって、教科学習

へつなげて行くためにさらにどんな工夫をしたり、学習形態・方法を再考していく部分を考えていかなければならない。以後、引き続き研究をしていきたい。

また、考察で述べた「学び・成長し続ける姿勢」をより明確にしていくことが必要である。幼稚園・保育園の教育・保育内容と照らし合わせ、どのような姿勢を重点に育てたいのか、そのためにどんな教育・保育計画を立てればいいのか。小学校教育の中で、「学び・成長し続ける姿勢」をどう伸ばしていくのか、そのためにどのような教育計画を立てていけばいいのか。こうした点についてお互いに理解し合うことをもっと深めていかなければいけないと考える。入門期を隔てた両者が、お互いに教育・保育の重点がどこにあり、何を大切に育ててきたか・いくかという積極的なアピールをし合っていくこと。小学校は、幼稚園・保育園が「育ててきた」ものをどう大切に生かすか。幼稚園・保育園は、小学校が「育てていきたい」ものにどうつなげていくか。幼小連携が叫ばれる中で、何を連携するのかをもう一度、考えてみるべきである。

(参考文献)

- ・人権教育を生かした学級作り「小1プロブレム」に挑戦する 新保真紀子著 2001年 明治図書
- ・ベーシック現代心理学「乳幼児の心理学」内田伸子・臼井 博・藤崎春代著 1991年 有斐閣
- ・幼児教育へのいざない 佐伯 胖著 2001年 東京大学出版会
- ・「学び」を問いつづけて 佐伯 胖著 2003年 小学館
- ・算数教育の新しい体系と課題2 片桐重男著 1995年 明治図書
- ・算数科の指導内容の体系 片桐重男著 2001年 東洋館出版社